2023年5月7日　朝 礼 拝 順 序 (午 前 10 時 半)　(№19)

司式　杉山昌樹牧師

前　奏　奏楽　堀口愛子姉

開 会 招 詞　詩編24編7－10節

＊ 賛 美 歌　7:1（ソングシート）

1. 父の神よ 夜は去りて、新たなる 朝となりぬ。我らは今 御前に出て、御名をあがむ。アーメン

＊ 開 会 祈 祷

罪 の 告 白　祈祷書2　罪の告白①

神よ、わたしを憐れんでください。御慈しみをもって。深い御憐れみをもって、背きの罪をぬぐい去ってください。わたしの咎をことごとく洗い、罪から清めてください。わたしは咎のうちに産み落とされ、母がわたしを身ごもったときも、わたしは罪のうちにあったのです。わたしを洗ってください。雪よりも白くなるように。神よ、わたしの内に清い心を創造し、新しく確かな霊をさずけてください。救いの喜びを再びわたしに味わわせ、自由の霊によって支えてください。主よ、わたしの唇を開いてください。この口は、あなたの賛美を歌います。　主イエス・キリストの御名によって。アーメン。　(詩編51)

罪の赦しの宣言

十　戒　祈祷書4

1. あなたは、わたしのほかに、何者をも神としてはならない。
2. あなたは自分のために刻んだ像を造ってはならない。それにひれ伏してはならない。それに仕えてはならない。
3. あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない。主は、み名をみだりに唱える者を、罰しないではおかない。
4. 安息日をおぼえて、これを聖とせよ。
5. あなたの父と母を敬え。
6. あなたは殺してはならない。
7. あなたは姦淫してはならない。
8. あなたは盗んではならない。
9. あなたは隣人について偽証してはならない。
10. あなたは隣人の家をむさぼってはならない。隣人の妻、またすべて隣人のものをむさぼってはならない。　(出エジプト20、申命記5)

＊ 賛 美 歌　７：２（ソングシート）

２. 万有の主よ、御顔仰ぐ僕らを 強くなして、天つ国の 尽きぬ恵みを得させ給え

アーメン

公 同 の 祈 祷　35　伝道開始記念日

愛と恵みに富たもう父なる神さま、良い知らせを伝える者の足がこの町にもおとずれたことを感謝します。平和の福音を携えた伝道者たちが、走るべき行程を走り抜いてキリストに従ったよう

に、わたしたちも彼らのあとに倣うことができますように。

また、次々と起こされた信徒たちがキリストの証人となったように、わたしたちも、この町に福音を宣べ伝える働きを続けることができますように。アーメン。

(イザヤ52、フィリピ3、使徒20・1)

献　　金　（黒）教会活動・（赤）全国青年　70

今献ぐるそなえものを　主よ　清めて受けたまえ　アーメン

聖　書　朗　読　　出エジプト33章13－23節（旧約聖書150頁）

ヨハネ14章1－12節（新約聖書196頁）

説　教・祈　祷　「道が示される」杉山昌樹牧師

＊ 賛　美　歌　７４:１，３（ソングシート）

1. わが主に赦され　心安らぎ　新しき力　心に満ちて

主の道　歩まん

3. 心を尽くして　我が主を愛す　おきてを喜び　力を尽くし

主の道　歩まん　主の道　アーメン

＊ 主　の　祈　り　　祈祷書1

天にます我らの父よ

願わくは御名をあがめさせたまえ

御国を来たらせたまえ　御心の天になるごとく 地にもなさせたまえ

我らの日用の糧を 今日も与えたまえ

我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく 我らの罪をも赦したまえ

我らを試みに会わせず 悪より救い出したまえ

国と力と栄えとは 限りなく汝のものなればなり　　アーメン。

＊ 頌　　栄　　６３

天つちこぞりて かしこみたたえよ、み恵みあふるる　父、み子、み霊を。アーメン

＊ 祝　　祷

後　　奏　　(黙祷)

報　　告 司会門脇陽子長老・受付門脇献一長老（次週：古澤純一・門脇陽子長老）

礼拝当番/献金当番　有山敏、高風聞隆/八児慶汰、番場朝喜　（次週）横山真実、森川裕子/横山芽愛、横山遥音

本日　受付 １階：星野房子執事　２階：大日南信也執事 ／ZOOMホスト・録音：杉山陽一

次週　受付 １階：森永美保執事　２階：佐藤紀子執事 ／ZOOMホスト・録音：雨宮信

ヨハネ14：1－12　道が示される

イエスの励まし

今日の聖書は力強いイエス様による励ましの言葉です。それは、心がざわつくところで、心騒がせるな、イエス様が共にいる、という私たち一人一人に対する励ましです。イエス様との関係の中で、新しい力が与えられているという励ましです。それはどこか遠いところにあるのではなく、いつか分からないような将来を期待するのでもなく、今このところですでに与えられている励ましです。

心を騒がせるな？

このところの状況は、最後の晩さんのあとで、弟子たちに新しい掟すなわち、「互いに愛し合え」との掟を与えたことに続く場面です。それは、イエス様が、これから、弟子たちの所を去っていくという流れの中で語られています。当然ながら弟子たちは、このような言葉に完全には納得していません。彼らは、イエス様が地上において勝利されることを望んでいたでしょうし、これから、自分たちが望んだような、勝利の時代が来る、と考えていたはずです。ところがイエス様は地上から、そして弟子たちの前から去っていくと言い出しているのです。弟子たちは、この時までイエス様こそ確かな方と見込んで、このイエス様を当てにして、人生を考えていたはずです。それが突然いなくなる、というのですから、その衝撃は、かなりのものだったはずです。これは想像してみるしかないのですが、そして、そういうことはあってほしくないのですが、例えば私たちであれば、人生をかけて取り組んでいた仕事が、突然、明日からなくなる、この会社は、この部門は、この職種は終わりです、と言われるような感じかもしれません。もちろん、どうするんだ、どうしてくれるんだ、ということになるでしょう。ところが、そこで、イエス様は「心騒がせるな」と命じられるのです。もちろん、その場合には、根拠があって言っておられるのです。そして、その決定的な根拠を信じるようにと招いておられるのです。

信じること

それが「神を信じなさい、そして私をも信じなさい」という言葉です。ここでは神様とイエス様とが並んでいます。それはただ並んでいるのではありません。むしろ、神様とイエス様とは、全く同じではないけれども、別々でもない、一つの関係の中にある、この事がこの短い言葉で表されているのです。そのような神様とイエス様との関係が前提になって、以下の言葉が語られていくのです。その場合には、「神を信じなさい、そして私をも信じなさい」という命令は、漠然と、神様とイエス様を信頼しているように、ということではありません。そうではなく、むしろ、この神様とイエス様の関係性、その中でなされていること、それを含めて、そこに信頼を置いていくように、というのです。丁度、今まで、イエス様の地上における言葉や業を当てにしてきたように、これからは、天にある神さまとイエス様に全面的な信頼を置くことができる、このように言うのです。それは丁度、今このところでイエス様を直接見ることができないという、わたしたちの状態ととても良く似ています。しかし、弟子たちにしても、私たちにしても、決して動揺したり、不安がる必要はない、あなたたちは信頼できるものをもう持っていると宣言されているのです。

場所とは？

それが、2節で言われております「私の父の家には住むところがたくさんある」という言葉によって表されています。私の父の家ですから、これは神様のおられるところ、はっきりと言えば、天ということになります。天において、あなたたちの居場所がある、ということがまず言われます。さらに、もしなくても、わたしが場所を用意する、と続きます。これは、おそらくこれからなされること、すなわち、十字架が意識されているように思われます。イエス様があの十字架において、成し遂げられたこと、罪の贖いによって、私たちのいるべき場所が十二分に天に確保される、このように言っておられるのです。けれども、私たちはなお、そういわれても、それは天でしょう、私たちの今いるこのところではどうですか、と言いたくなってしまいます。それに対してイエス様は、「場所を用意したら戻ってきて、あなた方を迎える。こうしてわたしのいる所に、あなた方もいることになる」と言います。確かに天なのです。でも、その天の居場所に、今ここにいながら、あなた方は私と一緒にいることになる、というのです。これは、私たちが死んだら天に行く、という話ではありません。むしろ、今、実際にここで生

きている私と、天とがつながる、天にいるイエス様とつながるようになる、と言っておられるのです。そういう居場所を私は造るとイエス様は言われているのです。

イエスの道？イエスが道

そういうわけだから、私がこれからどこに行くか、その「道」が分かるだろうとイエス様は弟子たちに言うのですが、弟子たちはこの言葉を全く理解していません。トマスは「主よ、どこへ行かれるのか、私たちにはわかりません」と５節にあります。何しろ、今の今まで、この後エルサレムで、どんなことが起きるだろう、あれもしよう、これもしようと、思いめぐらしていたところに、いきなり、天の話になってしまいましたから、どうもよくわからない、というのが正直なところだったようです。それで、どうやったらその道がわかりますか、と尋ねています。しかし、これは私たちにとっても、しっかりと理解したい言葉です。イエス様が天に行って、そしてまた戻ってくる、という場合に、それは、どのような道筋なのか、についてです。それで、答えから言ってしまいますと、イエス様が、十字架につかれ、罪をあがない、復活によって死に勝利して、命の初穂になり、天に昇り、着座し、そこから、聖霊を派遣してくださる、というまさにわたしたちが、ウェストミンスター教理問答などで学ぶ、イエス様のお働きのことがここで語られている、ということになります。そのようにして、イエス様は天と、天におられる神様とわたしたちをつなぐ、というのです。しかし、ここで言われているのは、理論ではありません。なぜなら、イエス様自身が、私たちと神様とをつなぐ道だ、というからです。それも、本物の、命を与える、唯一の道だ、このように言うのです。

父を見る

さらに、そればかりではなく、このようにイエス様とやり取りしているものは、すでに父なる神さまを見ているのだ、というのが7節の言葉の意味です。「今から、あなたがたは、私の父を知ることになる。いや、すでに父を見ている」とある通りです。しかし、このように書かれても、私たちは、でも、イエス様を直接見ることができないのなら、この事は成り立たないのでは、と思ってしまいます。それは、この所で、フィリポが、そんなまどろこしいことを言わないで、神様を直接見せてくださいよ、そうしたら満足するんですから（9節）、と言っているのと似ているかもしれません。私も、また、ここに突然神さまが、魔人か何かのように、ぼわっと現れてくれたら、と思わなくもありません。こんな言葉を重ねなくても、論より証拠、ではないか、と思わなくもないのです。もっとも、そうであればそれこそ、言葉を語る私の仕事自体、いらない仕事になるかもしれませんが、それはともかく、この時イエス様は、このフィリポの言葉に、ああ、分かっていない、と答えておられるのです。そうではないのだ、何で、父を見せろ、というのだと、嘆いてすらおられるのです（9節）。

イエスを見る

そして問いかけています。何で、わたしが父の中に、私の中に父がいることを信じないのか、とです。これは10節の言葉ですけれども、これではっきりとしていることがあります。それは、父なる神さまを信じる、そしてイエス様を信じる、ということは、やはり、この神様と、イエス様が、お互いの中に、相互に存在している、そのような意味でつながっている、ということを信じる、ということに大きな意味がある、ということです。もっと言えば、父なる神さまと、イエス様とがつながっていることを信じる、ということです。そして、そのことを信じることは、特に大切な一つのことと関係しています。それは、イエス様が語られた言葉がなんであるのかについての理解です。例えば、私たちは今、聖書を読んでいて、イエス様が語られた「言葉」を直接読んでいるのです。その場合に、この言葉がどこから来たのか、を正しく理解する道筋は、この神様とイエス様とがつながっていると信じられるかどうかにかかっているのです。言い換えますと、イエス様が語っている言葉は、勝手に語っているのではないというのです。

イエスの中の父

それは10節の後半を読みますと明らかです。「わたしがあなたがたに言う言葉は、自分から話しているのではない。わたしの内におられる父が、その業を行っておられるのである。」ここで言われている

ことは明確です。イエス様が、何か言葉を語られる、それは、自分で勝手にしゃべっているのではない、むしろ、私の中に父なる神さまがおられて、その神様の業として、言葉が語られている、というのです。まさに、イエス様の言葉、この時語られた言葉、そして、今わたしたちが読んでおりますこの言葉、それは、神様の業として、神様が、働いておられる徴として、語られているというのです。それゆえ、イエス様は、このようなしるしとしての言葉を信じるように、と言われます。11節で「業そのものによって信じなさい」というのはそのことです。イエス様の言葉が、神様の言葉であることを信じるように、と招かれているのです。

私の中の父

しかし、事はそれで終わらないのです。12節をもう一度読んでみます。「はっきり言っておく。わたしを信じる者は、わたしが行う業を行い、また、もっと大きな業を行うようになる。わたしが父のもとへ行くからである。」。ここでは大きく分けで二つのことが言われています。一つ目は、イエス様の言われることを信じる者は、イエス様と同じことを行い、さらに大きな業を行う、という言葉です。この場合の「業」とは、イエス様をして語らせる、神様の業でした。そうしますと、イエス様の言葉を信じる者たち、即ち私たちは、このイエス様と同じこと、神様が私たちの中に働いて、言葉を語らせることが起きる、ということになります。しかも、イエス様と同じと言うだけでなく、もっと大きなこと、それが、どのような意味で大きいのかははっきりしませんが、おそらくは、イエス様が12弟子たちに語ったよりももっと多くの人たちに、神様の業としての言葉を語るようになる、という意味だと思われます。そして、このような神様の業、私の中で、神様が語られる、ということは、何も牧師や役員に限ったことではありません。皆さんが、日常の生活の中で、語る言葉、そこにもまた、この神様のお働きが現れるというのです。

道が示される

なぜなら、それはこの12節の二つ目の事柄によってはっきりと示されているからです。12節の最後はこうでした。「私が父のもとに行くからである」。イエス様が、父のもとに行く、というのは、復活した後、天に昇り、神様の右の座に着かれること、天の権威ある王座に着かれることです。しかし、それで終わりではありません。詳しくは来週の個所になりますけれども、そこからイエス様は、聖霊なる神を、わたしたちの中に送って下さり、住まわせてくださるのです。今、私たちは、この聖霊のお働きを自分の中に受けています。この事によって、天におられる父なる神さまと、イエス様と、地上にいる私たちの間に、はっきりとしたつながり、一つの道すじが示されています。それゆえ、わたしたちは、神様を内に宿すものとして、この日も、これからも生きていくのです。

祈祷

主イエス・キリストの父なる神様。あなたは、今も天において、御子と共に私たちを見守り、そればかりでなく、私たちを日々強め、私たちに語りかけ、信仰を養ってくださいます故に感謝します。私たちは、あなたの助けなしでは、片時も信じていることができないものです。どうぞ、私たちが目の前の状況に揺り動かされるのではなく、あなたにあって強められて、この一週の旅路を勇気をもって送ることができますように。主イエス・キリストのみ名によって祈ります。